

中 学 校

平成 2 7 年度

教育研究員研究報告書

道 徳

東京都教育委員会

目 次

| | | |
|-----|-------------|----|
| I | 研究主題設定の理由 | 1 |
| II | 研究の視点 | 3 |
| III | 研究の仮説 | 5 |
| IV | 研究の方法 | |
| 1 | 研究構想図 | 7 |
| 2 | 仮説の検証 | 7 |
| V | 研究の内容 | |
| | 〈指導例1：第1学年〉 | 8 |
| | 〈指導例2：第2学年〉 | 13 |
| | 〈指導例3：第3学年〉 | 18 |
| VI | 研究の成果と課題 | 23 |

議論を通して道徳的判断力を育てる道徳科の指導の工夫

I 研究主題設定の理由

1 道徳教育を取り巻く社会情勢

平成 27 年 3 月、学校教育法施行規則の一部を改正する省令及び学習指導要領の一部改正に関する告示が公示された。改正は、小学校では平成 30 年度から、中学校等では平成 31 年度から、それぞれ施行され、これまでの「道徳の時間」が「特別の教科である道徳」（以下「道徳科」という。）へ改められる。この改正により、平成 25 年 2 月の教育再生実行会議による第一次提言「いじめ問題等への対応について」から始まった道徳教育の抜本的改善・充実について、具体的な取組やその方向性が示されたこととなる。

道徳の教科化に当たっての具体的なポイントとしては、

- ① 道徳科に検定教科書を導入
- ② 内容について、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに改善
- ③ 問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れ、指導方法を工夫
- ④ 数値評価ではなく、児童・生徒の道徳性に係る成長の様子を把握

が示された。¹

道徳の教科化は、これまで指摘されてきた、

- ・ 「道徳の時間」が各教科等に比べて軽視されがち
- ・ 読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導
- ・ 発達の段階などを十分に踏まえず、児童・生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業

といった道徳の時間の課題²を改善することを意図している。

- ・ 特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。
- ・ 多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である。

という中央教育審議会の答申³を踏まえ、「発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う『考える道徳』、『議論する道徳』への転換を図る」⁴ことが、これから道徳科が目指すべき方向であると考えられる。

先の告示では、改正学習指導要領の全面実施までの移行措置として、平成 27 年度から、小学校では平成 29 年度まで、中学校では平成 30 年度までの道徳の指導に当たっては、その全部又は一部について改正後の学習指導要領の規定によることができるとしている。しかし、「平成 26 年度

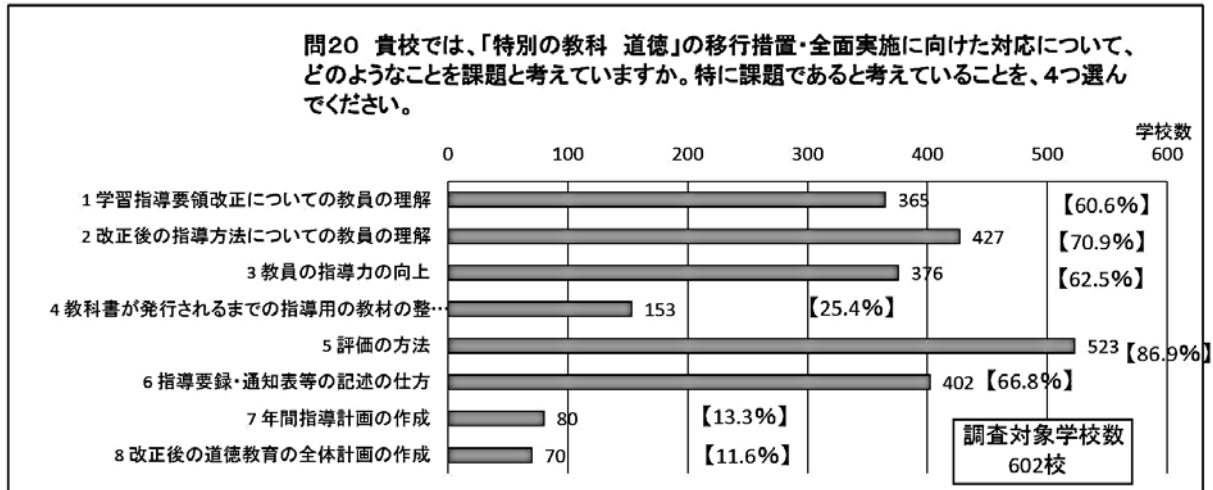
¹ 文部科学省「道徳教育の抜本的改善・充実」（平成 27 年 3 月）

² 脚注 1 に同じ

³ 「道徳に係る教育課程の改善等について」（平成 26 年 10 月 21 日）

⁴ 中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成 27 年 7 月）p. 2

道徳教育推進状況調査」⁵の集計結果によれば、平成 27 年度中に、移行措置期間中の先行実施を予定している中学校は、調査対象 602 校中 13 校 (2.2%)、先行実施に向けた取組（検討や準備等を含む）を予定している中学校は、229 校 (38.0%) であり、合計しても全体の 40.2%にとどまっている。また、道徳科の移行措置及び全面実施に向けた対応の課題に関する調査では、以下のような結果となった。



教科化に伴う評価の方法についての関心が最も高く、それに次ぐものとして「改正後の指導方法についての教員の理解」が挙げられている。これは、先述の「道徳の教科化に当たっての具体的なポイント」の③「指導方法を工夫」とつながるものである。

改正学習指導要領の内容を理解し、指導の工夫として求められる「考える道徳」、「議論する道徳」への転換を図っていくことで、学校として改正学習指導要領の全面実施に向けた基盤を固めていくことが、今求められていると言える。

本研究においても、この点を研究の中核に置き、研究主題を設定することとした。

2 「道徳科」の目標

改正学習指導要領（中学校）では、道徳科の目標が次のように示されている。

（略）よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

小学校との違いは、「物事を多面的・多角的に考え」が「物事を広い視野から多面的・多角的に考え」⁶となっている点と、「自己の生き方についての考えを深める学習」⁷が「人間としての生き方についての学習」⁸となっている点である。この2点の相違は、道徳の教科化に当たっての具体的なポイントの一つとして挙げられた、「発達の段階をより一層踏まえた内容へと改善していく」という観点から、中学校における道徳科の特質として留意しておく必要がある。特に、中学生という発達の段階を踏まえ、自分自身の生き方を見つめさせる際に、人間としてどのように在るべきか、どのように生きるべきかという視点を持たせるようにすることが大切である。

⁵ 平成 26 年 3 月東京都教育委員会実施

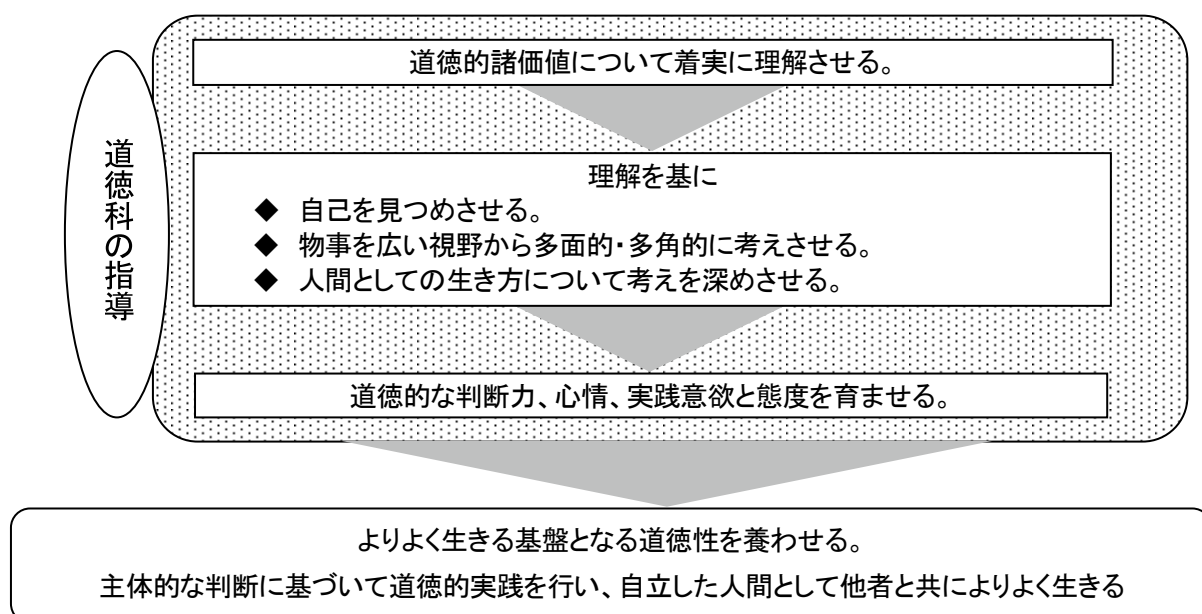
⁶ 引用中の傍点は本報告書作成者による。

⁷ 脚注 7 に同じ。

⁸ 脚注 7 に同じ。

以下に道徳科の目標の考え方を図で示す。

【道徳科の目標の考え方】



また、ここで示された道徳科の目標において着目しておく必要があるのは、「自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して」と、指導方法が明示されたことである。この「人間としての生き方についての考えを深める学習」を設定する上でのキーワードが、「考える道徳」、「議論する道徳」である。道徳科の授業を実践していく上では、これを踏まえ、何について、どのように考えさせたり議論させたりするかを工夫することが、大きなポイントとなると言える。

3 研究主題の設定

改正学習指導要領の全面実施を見据え、今後取り組んでいくべき問題を明らかにするとともに、その問題を解決していくための具体的な手だてについて考察し、生徒に確かな道徳性を身に付けさせることができる道徳科の指導の工夫を提示することが、本研究のねらいである。そこで、これまで見てきた道徳の教科化を中心とする道徳教育を取り巻く社会情勢や、「道徳科」の目標、求められる指導内容や指導方法等を踏まえ、本研究では研究主題を「議論を通して道徳的判断力を育てる道徳科の指導の工夫」とした。

II 研究の視点

設定した研究主題に基づき、本研究ではまず、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために道徳科で求められている指導について、一単位時間でどのように具体化していけばよいのかを考察することにした。そのため、改正学習指導要領の道徳科の目標のうち、特に、指導の方法に関わる「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」の箇所に着目し、これを具体的な教材や授業に照らしながら捉えることとした。

1 「道徳的諸価値についての理解を基に」について

「道徳的諸価値についての理解を基に」という言葉からは、以下の2点を確認しておく必要があると考える。

まず1点は、「内容を端的に表す言葉⁹そのものを教え込んだり、知的な理解にのみとどまる指導になったりすることがないように十分留意する必要がある¹⁰」ことである。道徳的価値について、その意味や意義を深く理解しなければ、道徳的な判断力や心情を育むことはできないからである。

もう1点は、道徳的価値についての理解がゴールではないということである。道徳的価値の意味や意義、あるいはその大切さについて理解をさせて授業を終えるのではなく、全員が理解を共有した状態で「自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」に取り組んでいけるように授業の展開を計画することが求められているからである。

2 「自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え」について

道徳的価値の意味や意義について理解をした上で、それを「自分との関わりも含めて理解し、それに基づいて内省¹¹」することで、理解した道徳的価値を自分自身の問題として捉えられるようになり、自己の在り方・生き方に反映させていくことができるようになる。

また、「道徳的価値の多面性に着目させ、それを手掛かりにして考察させて、様々な角度から総合的に考察することの大切さや、いかに生きるかについて主体的に考えることの大切さに気付かせること¹²」によって、多様な価値観の存在する変化の激しい社会において、自分はどのように生きていけばよいのかを考え、判断できるようになる。

そのような「自己」と「物事」への視点をもつための活動が「議論」である。道徳的価値についての理解を共有する生徒同士が、それぞれのものの見方や考え方に基づいて話し合う中で、自己を見つめ直したり、異なるものの見方や考え方に触れて自分のものの見方や考え方を広げたり深めたりできるよう、授業展開の中に効果的に議論する場面を設定することが必要となる。

3 「人間としての生き方についての考えを深める」について

ここは、小学校の道徳の目標において「自己の生き方についての考えを深める」とある部分が中学校において「人間としての生き方についての考えを深める」とされている点にポイントがある。中学生という発達の段階に応じ、自分は「人間として」どのように生きていくべきなのかという視点をもつことができるよう、指導の工夫をすることが求められる。

「人間として」どのように生きるべきかを考えるということは、多様な価値観が存在し変化の激しい社会における他者との関わり合いを踏まえて、自分はどのようにあるべきかを考えるということである。そこでは時に、自分の意志や欲求に反するような判断や行動が求められることもある。そうしたことも理解した上で、自分の在り方・生き方について考えるところに、議論することの目的がある。中学校という発達の段階を意識し、また、各学年による実態の違いなども踏まえながら、「人間としての生き方についての考えを深め」させることができるようにすることについても、指導の工夫が求められるところである。

⁹ 改正学習指導要領では、内容項目ごとに、「自主、自律、自由と責任」(A-(1))、「友情、信頼」(B-(8))など、それぞれの内容を端的に示す言葉が付記された。

¹⁰ 中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 p. 19

¹¹ 中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 p. 15

¹² 中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 p. 16

4 研究仮説の設定に向けて

研究主題に基づき、道徳科の目標のうち、特に指導の方法に関わる部分について考察した。そこから、指導の工夫が求められることとして、以下の3点が明らかになった。

- ・ 道徳的価値の意味や意義について深く理解させること。
- ・ 道徳的価値について理解した上で、自己を見つめ直したり、異なるものの見方や考え方に触れたりできるよう、効果的に議論する場面を設定すること。
- ・ 自己の在り方・生き方の先に、人間としての在り方・生き方を見つめ、考えを深められるようにすること。

これらを基盤とすることで、道徳科の目標を達成するための指導を具現化することが可能となると考えた。本研究では、このような考えを基に、研究の仮説を設定することとした。

Ⅲ 研究の仮説

— 仮説 —

生徒が実生活で出会うであろう場面や状況において、「人間としてどのように対処することが望まれるか」を議論させることにより、道徳的価値の多面性に気付かせるとともに、物事を様々な角度から考察させることができ、道徳的判断力を育てることができるだろう。

本研究は、道徳科の目標を達成するための指導の工夫を示すことを目的としている。改正学習指導要領の道徳科の目標に基づき、本研究では、上記のように研究の仮説を設定した。

ここでは、道徳性の諸様相として示される四つの要素（道徳的判断力、心情、実践意欲と態度）のうち、特に道徳的判断力を育成することに重点を置くこととした。様々な場面において、自分はどうあるべきか、どのように行動すべきかを、道徳的諸価値に基づいて適切に「判断」できる生徒を育てることに主眼を置きたいと考えたためである。

そのための手だてとして、「議論する」活動を授業の中核に位置付けることとした。議論することを通して、自己を見つめ直したり、異なるものの見方や考え方に触れて自分のものの見方や考え方を広げたり深めたりしていけるようになること、すなわち「物事を広い視野から多面的・多角的に考え」られるようになることで、本研究のねらいである道徳的判断力の育成が図ることができると考えた。

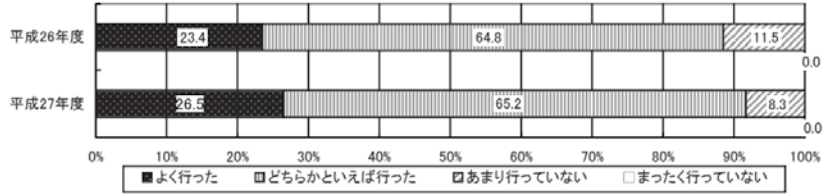
次ページの資料は、「平成27年度 児童・生徒の学力向上を図るための調査」学校質問紙調査の集計結果の抜粋である。¹³

「様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導を行った」、「思考力・判断力・表現力等を育むための言語活動の充実を図った」、いずれの質問についても、90%程度の学校が「よく行った」、「どちらかといえば行った」と回答している。そして、この回答と各教科の平均正答率との関係を見ると、言語活動の充実を図っている学校の生徒ほど各教科の平均正答率が高いことが分かる。

どのように生徒から考えを引き出し、深く考えさせ、判断させたり表現させたりするか、その工夫が生徒の学力向上に有効だということである。これは、道徳科のキーワードである「考える道徳」、「議論する道徳」にも通じる。より効果的な言語活動を取り入れることで、「よりよく生きる基盤となる道徳性」を着実に育むことができるということである。

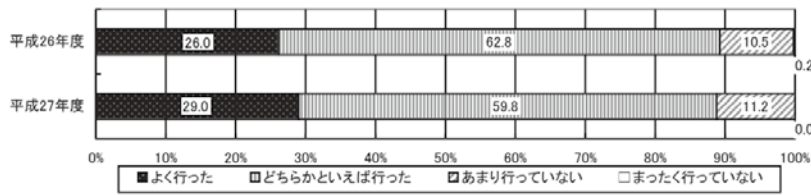
¹³ 平成27年度 児童・生徒の学力向上を図るための調査報告書 p. 244

(3) 様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導を行った。



| 考えを引き出したり思考を深めたりする発問や指導と平均正答率との関係 | 平均正答率 (%) | | | | | |
|-----------------------------------|-----------|------|------|------|------|------|
| | 国語 | 社会 | 数学 | 理科 | 英語 | 教科合計 |
| よく行った | 57.0 | 56.2 | 60.7 | 52.9 | 62.9 | 57.9 |
| どちらかといえば行った | 53.2 | 52.0 | 55.5 | 48.7 | 58.4 | 53.6 |
| あまり行っていない | 51.5 | 51.1 | 53.8 | 47.9 | 55.0 | 51.9 |

(4) 思考力・判断力・表現力等を育むための言語活動の充実を図った。



| 言語活動の充実と平均正答率との関係 | 平均正答率 (%) | | | | | |
|-------------------|-----------|------|------|------|------|------|
| | 国語 | 社会 | 数学 | 理科 | 英語 | 教科合計 |
| よく行った | 56.8 | 56.3 | 60.2 | 52.5 | 62.9 | 57.7 |
| どちらかといえば行った | 53.3 | 52.1 | 55.9 | 48.9 | 58.4 | 53.7 |
| あまり行っていない | 52.7 | 51.3 | 54.2 | 48.8 | 57.2 | 52.8 |

道徳的諸価値について自分の問題として捉えさせ、考えさせ、議論させるためには、議論する課題が生徒自身にとって現実味のあるものであることが重要である。自分や身の回りの人間が実際に経験したり、自分自身が生きていく中で今後経験することが予想できたりする課題について議論させることで、必然的に自分の問題として向き合いながら道徳的判断力を養うことができると考えられる。¹⁴また、「議論」を「人間としての生き方につ

いての考えを深める学習」にするためには、議論させる際に、「人間として」という視点を明確にもたせることも必要である。「人間としてどのように対処することが望まれるか」という視点をもって議論することで、時に自分の意志や欲求に反する判断や行動が求められる状況もあることを理解した上で、そこに自分がどのように関わっていくかを「多面的・多角的」に考えることができるようになる。

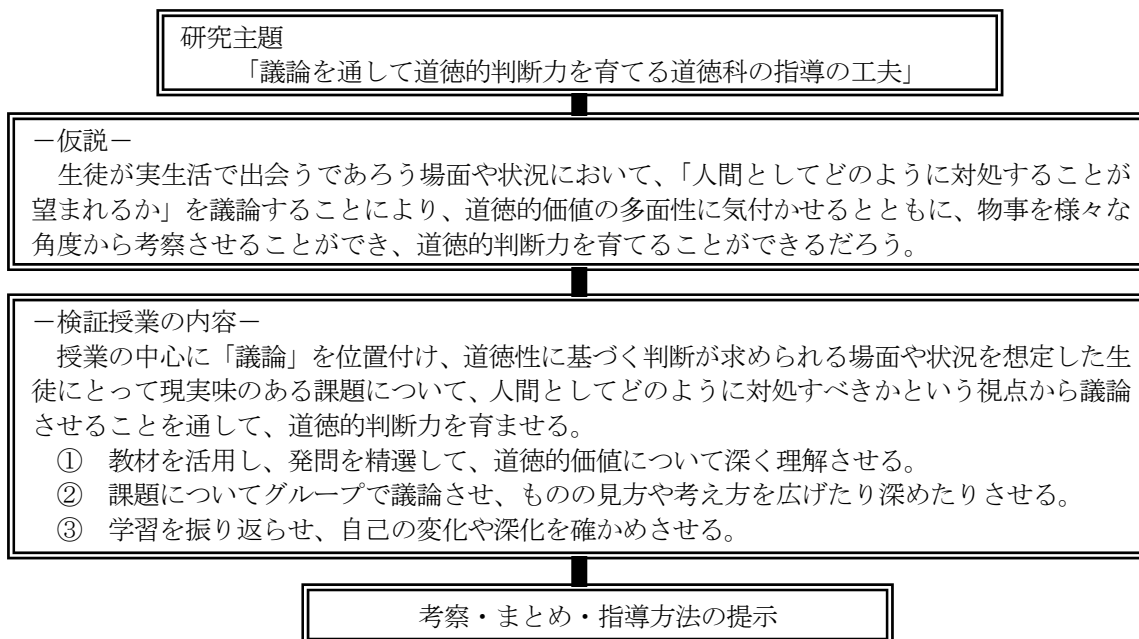
以上のことから、本研究では、研究主題「議論を通して道徳的判断力を育てる道徳科の指導の工夫」に基づき、研究の仮説を「生徒が実生活で出会うであろう場面や状況において、『人間としてどのように対処することが望まれるか』を議論させることにより、道徳的価値の多面性に気付かせるとともに、物事を様々な角度から考察させることができ、道徳的判断力を育てることができるだろう。」と設定し、授業実践を通して検証していくこととした。

「議論」が効果的なものとなるためには道徳的価値について深く理解をしておく必要がある。また、「議論」を一単位時間の授業の中核として位置付けるためには十分に時間を確保することも必要である。そのため、議論する活動に入る前段階での指導についても工夫する必要があると考えた。そこで、検証授業の設定に当たっては、授業前半で教材（読み物資料）を活用した指導を行い、後半に課題について議論させるという枠組みにし、教材を活用した指導については道徳的価値の意味や意義について理解させることに焦点を当て、発問を精選することとした。

¹⁴ 中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 p. 17 には、道徳的諸様相について、「日常生活や今後出会うであろう様々な場面及び状況において、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質」と説明している。

IV 研究の方法

1 研究構想図



2 仮説の検証

検証授業では、一単位時間の道徳科の授業の中核に「議論」を位置付ける。道徳性に基づいた判断が求められる場面や状況を想定した生徒にとって現実味のある課題を提示し、「人間としてどのように対処すべきか」という視点を明確にもたせて議論させる。この活動を通して、物事を多面的・多角的に考えさせながら道徳的判断力の育成を図り、生徒の変容を把握することによって仮説を検証する。

検証授業を実施するに当たっては、特に以下の2点の指導の工夫を具体化して示す。

〈指導の工夫〉

- (1) 生徒が実際に経験したり、今後経験することが予想できたりする、道徳性に基づく判断が求められる場面や状況を想起した現実味のある課題を設定する。
- (2) 課題に対して「人間としてどのように対処すべきか」という視点から議論させる。

また、検証授業実施後に生徒の変容を把握・分析し、成果と課題を明らかにして、研究の仮説を検証する。

【検証授業の概要】

- 第1学年 内容項目 C(10) 遵法精神、公德心
教材名：「仏の銀蔵」（文部科学省「中学校道徳読み物資料集」より）
議論の課題 「なぜ、それを守るのですか。」
- 第2学年 内容項目 C(14) 家族愛、家庭生活の充実
教材名：「一冊のノート」（文部科学省「私たちの道徳」より）
議論の課題 「あなたが『親』ならどうしますか。」
- 第3学年 内容項目 D(22) よりよく生きる喜び
教材名：「足袋の季節」（文部省「中学校 道徳の指導資料」第3集より）
議論の課題 「あなたの人生を支えるものは何ですか。」

V 研究の内容

〈指導例：第1学年〉

1 主題名 法やきまりの意義を理解し、そのよりよい在り方について考え、規律ある安定した社会の実現に努める。 内容項目C (10)

2 教材名 「仏の銀蔵」(文部科学省「中学校道徳読み物資料集」)

3 本時のねらい

法やきまりの意味や意義を理解し、自分の内にある規範意識に従って生きようとする道徳的実践意欲及び判断力を育てる。

4 教材について

銀蔵は、高い利息をつけて金を貸しては厳しい取り立てをし、人々から「鬼の銀蔵」と呼ばれていた。しかしある日、証文綴りをカラスに持って行かれ、貸した金の取り立てができなくなる。銀蔵から金を借りていた人々は、これで銀蔵の厳しい取り立てから逃れられると喜ぶが、暮らしに困る銀蔵の様子を見て、一人また一人と金を返し始める。証文もないのに借金を払う人々の姿に、銀蔵は、規範意識に従って生きることのすばらしさに気付く。自らの「規範意識」に従って借金を返し始めた「人々」に着目させることで、規律ある安定した社会を実現できる道徳的判断力の育成を図ることのできる教材である。

5 本時の学習活動

| | 主な学習活動(○基本発問◎中心発問・予想される生徒の反応) | 指導上の留意点 |
|--------|--|--|
| 導 入 | ○ 「高利貸し」という職業を知っていますか。 | ・ 教材名「仏の銀蔵」を提示し、銀蔵の職業である「高利貸し」について理解させる。 |
| 展 開 | <p>1 教材を通して、ねらいについての理解を深める</p> <p>○ なぜ人々は銀蔵に借金を返し始めたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 返さないと盗人になってしまうから。 ・ お天道様が見ているから。 ・ 借りたものは返すのが当たり前だから。 ・ 自分が借金を返さないことで、銀蔵の生活が苦しくなっているから。 ・ 正しいことをしようとする自分の心の声に従ったから。 <p>2 議論を通して、ねらいについての考えを深める</p> <p style="text-align: center;">【議論】あなたが守っていることはなんですか。なぜ、それを守るのですか。</p> <p>◎ あなたが、法律や規則で罰せられなくても、「守っていること」、「守ろうと心掛けていること」は、どのようなことですか。また、それはなぜですか。 (守っていること・守ろうと心掛けていること)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 落とし物は拾って交番に届ける。 ・ 困っている人がいたら声を掛ける。 ・ 行列に並ぶ時に順番を守る。 | <p>・ 教師が「仏の銀蔵」を範読する。</p> <p>・ 必要に応じて、教材のあらすじを説明したり、生徒に確かめさせたりする。</p> <p>・ なぜ盗人になるのは嫌なのか、「お天道様」とは何かといった点について補助発問をしながら着目させ、規範意識についての理解を深めさせる。</p> <p>・ 人々が、しかたなくではなく、自らの意思で自分の内にある規範意識に従って行動したことを捉えさせる。</p> <p>・ ワークシートに自分個人のことについて記入させてから議論に取り組みせるようにする。</p> <p>・ 理由については、「守っていること」、「守ろうと心掛けていること」の共通点に着目させて考えさせるようにする。</p> |

| | | |
|--------|--|--|
| 展 開 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 人にぶつかってしまった時に、ちゃんと声に出して謝る。 <p>(理由)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ お互いに気持ちよく過ごせるから。 ・ 相手が喜んでくれるから。 ・ 人として当たり前だから。 ・ それをきちんとやることで、自分が気持ちいいから。 ・ 気持ちのよい社会にするために必要だから。 <p>○ グループの議論を発表し合おう。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 議論では、まず「守っていること」、「守ろうと心掛けていること」をグループの全員が発表した後に、「それはなぜか」について互いに意見を出し合いながら考えを深めさせるようにする。 ・ 「決められているから従う」のではなく、法もきまりも規範意識も、互いに快適に過ごし規律ある社会を築くために必要なものであることに気付かせる。 <p>・ グループの議論の内容を発表させ、学級全体で共有させる。</p> |
| 終 末 | ○ この時間で考えたことや学んだことを振り返って整理しよう。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時を振り返り、特に議論の中で気付いたことや考えたこと、学んだことをワークシートに整理して記入させ、自己の変容を確かめさせる。 |
| 評 価 | <ul style="list-style-type: none"> ◆ 法やきまりの意味や意義を理解し、規律ある安定した社会を築いていくための判断力を高めることができた。 ◆ 自分の内にある規範意識に従って生きようとする意欲をもつことができた。 | |

6 指導の実際

実際の活動

【1 教材を通してねらいについての理解を深める】

議論の時間を十分に確保できるよう、教材についての発問を中心的な場面に関するものに絞り、必要に応じて補足質問で補うようにした。また、教材の内容を理解しやすくするために、「ページの切り替わるところ」が「場面が切り替わるところ」となるよう、教材¹⁵の提示の仕方を工夫した。

T：なぜ人々はお金を返し始めたのでしょうか。

S1：返さないと「盗人」になってしまうから。「盗人」になるのはいやだから。

S2：借りたら返すのが「当たり前」だから。

S3：お天道様に見られているから。

S4：銀蔵の生活が苦しくなっているから。

T：「お天道様」とは何のことでしょうか。

「神様」という答えが一番多かった。他には「太陽」、「御先祖様」、「自分の良心」

T：銀蔵の生活が苦しくなったことについて、人々はどうのように考えたでしょうか。

「かわいそう」という意見も出たが、「自分が借金を返さないから、自分のせいだ」、「自分の正しくない行いで、他の人に迷惑をかけている」といった、人々と銀蔵との関わりの中で考えている生徒が多かった。

◇ ねらいとする道徳的価値についての理解を深める

- ・ 借金を返すのは「当たり前」のことなのに、責任を果たさない人がいることによって、困ってしまう人が出てくるということ。
- ・ 人々が借金を返し始めたのは、証文がないにかかわらず、自分たちの内にある規範意

¹⁵ 文部科学省ホームページからダウンロードしたものを利用。

識に従っての行為だったということ。

つまり → 何が正しいのかを自分で判断し、自分の意志で正しい行動をしている。

【2 議論を通して、ねらいについての考えを深める】

議論が円滑に進行するように、まず個人で考えさせてからグループへ、「守ろうとしていること」を共有させた上でその理由を、というように、段階的に活動に取り組みさせた。

T：「人々がお金を返し始めた」ことと同じように、あなたが、法律や規則で罰せられなくても「守っていること」、「守ろうと心掛けていること」は、どのようなことですか。

「家で、学校で、駅で、お店で、道で…」と、様々な場面に考えが及ぶように、補助発問をした。

●生徒から出た「守っていること」、「守ろうと心掛けていること」

- ・ お年寄りや体の不自由な人に席を譲る。
- ・ エレベーターで「開」ボタンを押して待っている。
- ・ 点字ブロックの上に自転車を止めない。
- ・ 約束や時間を必ず守る。
- ・ 公共の場で騒いだり暴れたりしない。
- ・ 電車に乗る時は、降りる人が全員降りてから乗る。
- ・ 止まってくれた車の前は小走りで通って会釈をする。 など

T：なぜ、それを守ったり、守ろうと心掛けていたりしているのでしょうか。それぞれの共通点は何かということについて考えながら、守ったり守ろうと心掛けていたりしている理由を話し合ってみましょう。

●議論の様子

S1：席を譲って笑顔で御礼を言われると、気分がよくなるよね。

S2：落した財布が交番に届けられていた時は、うれしかったな。

S3：どちらも当たり前なことだと思うけれど。

S1：でも当たり前でない人もいるから、きまりやルールがあるのかもしれない。

S2：細かなことまで全てきまりができてしまったら、息苦しくなるよね。

T：どうしてそれを守ろうとするのだろう？

S1：当たり前だけれど、それをすることで相手が気持ちよくなるからかな。

S2：でも、「いいことした」と思えると、自分も気持ちがいいよね。

S3：その行動をしたほうも、それを受けたほうも、お互いにいい気持ちになれるということだね。

◇ ねらいとする道徳的価値についての考えを深める

- ・ 自分の内にある規範意識に従って行動することは、相手を思いやる気持ちもあるが、そうすることが正しいという自分自身の判断に基づいている。
- ・ 正しい行為を行うことで、自分自身が自己肯定感を得られると同時に、その行為を受けた相手に安心や安全を届けたり、相手の権利を保障したりすることもできる。
- ・ 法やきまりがなかったら、社会の秩序は失われてしまうかもしれない。しかし、法やきまりに従ってさえいればいいのではなく、なぜそれを守ることが必要なのかを考えていくことが大切である。
- ・ 身の回りの全てのことについて事細かに法やきまりで制約されたら、社会は窮屈なものになってしまう。それを防ぎ、円滑な社会秩序を保つのが規範意識である。

つまり → 自分を含めたみんなのために、みんなが、守るべきことを守っていく。

〈板書計画〉

なぜ人々は銀蔵に借金を返し始めたのでしょうか。

- ・「盗人」になっってしまうから。
- ・お天道様に見られているから。
- ・借りたものは返すのが当たり前だから。
- ・自分が借金を返さないことで、銀蔵の暮らしが苦しくなっているから。

○正しいことをしようとする自分の心の声に従った
規範意識


【議論】あなたが守っていることはなんですか。
なぜそれを守るのですか。

◆ 法律や規則で罰せられなくても、「守っていること」「守ろうと心掛けていること」はなんだろうか ↓ 共通点は？

◆ なぜ、それを守ったり守ろうと心掛けたりしているのだろうか ↓ 法律や規則との関係は？

自分を含めたみんなのために、みんなが、守るべきことを守っていく。

仏の銀蔵



高利貸し
江戸幕府一年12%
⇔
高利貸し一月25%

〈ワークシート〉

今日の道徳の時間を振り返って……

気付いたこと・考えたこと・学んだこと

【 課 題 】

議論の記録

個人の意見・考え

「」を通して、考えを深めよう。

「」を通して、理解を深めよう。

考えること……

道徳 学習日 月 日 ()

組 番 氏 名

個人の意見・考えと議論の記録をそれぞれ記入する欄をつくり、議論を通しての自己の変容を捉えやすくした。

発問の内容や議論の課題は後から記入させるようにし、あらかじめ分からないようにした。

〈授業後の生徒の感想（抜粋）〉

- ・ 守らなかったら罰せられるから守るという考えではなく、罰やペナルティがなくても、守ることによって自分や周りの人が気持ちよく生活できるから守ろうという考え方ができることが大切だと思った。
- ・ グループ内で様々な意見が出て、気付かされることも多く、銀蔵や人々の気持ちをいろいろな角度から見ることができた。特にこの時間でよかったのは、守るべきだと心掛けていることの多くが、誰かのためにつながる行動だと分かったことであった。
- ・ 「規範意識＝思いやりの心」と考えた。規則やきまりではなくても当たり前前に考えて、規範意識を大切にしたいと思った。常に他人のことを考えて気遣いのできる人間になりたい。自然にみんながそういうことができたなら、私達の生活は今よりもっと快適になるだろうと思った。
- ・ 法律や規則に反していなくても、世界をよくするには、規範意識が大切だと思った。自分ももっと「守ること」を増やし、今心掛けていることは今後も続けていこうと思った。

7 成果と課題

【1 教材を通してねらいについての理解を深める】

(1) 成果

- ・ 発問を精選したことによって授業のポイントを絞ることができた。そのため、ねらいとする道徳的価値にまっすぐに迫り、ぶれることなく理解を深めることができた。

(2) 課題

- ・ 発問をした箇所以外にも深く考えさせたい場面があったが、発問を精選したことで触れられなかった。議論の時間をいかに確保するかという点で、どこまでを取り上げるのかの見極めが難しい。教材やねらいによっては、2時間計画で設定することが必要となることもあると考えられる。

【2 議論を通してねらいについての考えを深める】

(1) 成果

- ・ 自分の経験に基づく身近な課題を設定したため、生徒たちが活発な議論を行うことができた。自分が守っていることと他のメンバーが守っていることとの共通点から規範意識に迫らせたことで、個別の行為を俯瞰（ふかん）的に捉えることができ、ねらいとする道徳的価値について考えを深めることができた。
- ・ 具体的な場面を思い浮かべ、考え、意見を交流させることを通して、今後出会うであろう場面について、「こんな時はこうしよう」という意欲を喚起することができた。

(2) 課題

- ・ 教材から議論に移る際に、「『仏の銀蔵』はもう終わりなのか」と戸惑う様子を見せた生徒もいた。また、授業の振り返りをする際にも、「仏の銀蔵」に関連した内容を書いていいのか質問をする生徒もいた。教材と議論とが本時のねらいで一貫していることを、教師自身はもちろんだが、生徒たちに明確に示して理解させておくことが必要である。
- ・ 「守っていること」、「守ろうと心掛けていること」として挙げられたものが、規範意識に関わるものと、そうでないもの（礼儀やマナー、作法、習慣など）とが混在していた。学級全体や個々のグループを観察し、必要に応じて規範意識に関わるものに絞らせるよう助言をすることが必要である。

<指導例2；第2学年>

1 主題名 父母、祖父母を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
内容項目C(14)

2 教材名 「一冊のノート」(出典：文部科学省「私たちの道徳 中学校」p.186～193)

3 本時のねらい

自分が家族から深い愛情を受けて育てられていることに気付かせ、家族に対する接し方を振り返らせたり、家族の思いを考えさせたりすることを通して、家族という存在のかけがえのなさを改めて実感させ、その一員として充実した家庭生活を築くための道徳的判断力を育てる。

4 教材について

最近物忘れがひどくなってきた祖母と同居する「僕」は、頼んだ買い物を忘れて、すぐに物をなくしたりする祖母の言動にいら立って、つい声を荒げてしまうこともあった。そんなある日、探し物をしていた「僕」は偶然、祖母が日々の思いをつづったノートを見つけ、それを読んでしまう。そこに書かれた言葉に、祖母の苦しみや自分たち家族を思い続ける深い愛情を感じた「僕」は、庭で草取りをしている祖母に、黙って寄り添う。家族が互いを思い合う気持ちに気付かせ、家族のかけがえのなさをあらためて実感させるとともに、その一員として充実した家庭生活を築いていくための道徳的判断力の育成を図ることのできる教材である。

5 本時の学習活動

| | 主な学習活動(○基本発問◎中心発問・予想される生徒の反応) | 指導上の留意点 |
|----|---|---|
| 導入 | ○ あなたにとって家族とは、どのような存在ですか。 ・いつも一緒にいる ・かけがえのない存在 ・自分を応援してくれる ・ちょっとうるさく感じる時もある | ・ 家族の存在を想起させ、ねらいとする道徳的価値への導入を図る。 ・ 家族の形態が多様化していることに配慮する。 |
| 展開 | 1 教材を通して、ねらいについての理解を深める ○ なぜ「僕」は黙って祖母と並んで草取りを始めたのだろうか。 ・ 祖母への「ごめんなさい」という思いを示そうと思ったから。 ・ 自分たちのことを思ってくれている祖母に、何か自分にできることをしてあげたかったから。 ・ 祖母への感謝の気持ちを、行動で示したかったから。 ・ 自分に愛情を注いでくれた祖母に、自分も優しい気持ちで寄り添いたいと思ったから。 2 議論を通して、ねらいについての考えを深める 【議論】あなたが「親」ならどうしますか。 | ・ 教師が「一冊のノート」を範読する。 ・ 必要に応じて、教材のあらすじを説明したり、生徒に確かめさせたりする。 ・ 「僕」が「一冊のノート」から何を感じ取ったのかを併せて捉えさせながら、考えさせる。 ・ この時の「僕」が心の中で祖母にどのような言葉を掛けていたかを想像させることで、さらに理解を深められる。 |
| | ◎ あなたの子が、自分にはよいところなどないと感じて何事にも自信がもてず、自分の将来にも夢をもてずに悩んでいます。あなたは「親」として、子供にどのように接しますか。それはなぜですか。 | ・ ワークシートに自分個人の意見・考えを整理し記入させてから議論に取り組みせるようにする。 |

| | | |
|--------|--|---|
| 展 開 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 悩んでいることについて話を聞き、自分が感じているその子のいいところを伝える。自分も誰かに話すとなれるし、人にどこかを褒めてもらったり認めてもらったりした時はうれしいから。 ・ 子供が何か言うてくるまでは、黙って見守る。あれこれ聞かれるのはいやだろうし、自分で解決していくしかないから。 ・ 接し方は様々だが、どのやり方も子を思う親の気持ち（愛情）によって支えられている。 <p>○ グループの議論を発表し合おう。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 議論では、互いの接し方やその理由のよいところを確かめ合った上で、方法の違いはどこから生まれるのか、その違いからどのようなことが見えてくるかを話し合わせながら、考えを深めさせるようにする。 ・ どの接し方が一番よいかといった議論にならないよう、「違いから学び合う」ことを明確に示すようにする。 <p>・ グループの議論の内容を発表させ、学級全体で共有させる。</p> |
| 終 末 | <p>○ この時間で考えたことや学んだことを振り返って整理しよう。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時を振り返り、特に議論の中で気付いたことや考えたこと、学んだことをワークシートに整理して記入させ、自己の変容を確かめさせる。 |
| 評 価 | <ul style="list-style-type: none"> ◆ 家族に対する接し方を振り返ったり、家族の思いについて考えたりすることを通して、家族という存在のかけがえのなさをあらためて実感することができた。 ◆ 家族の一員として、充実した家庭生活を築くための判断力を高めることができた。 | |

6 指導の実際

実際の活動

【1 教材を通してねらいについての理解を深める】

議論の時間を十分に確保できるよう、教材についての発問を中心的な場面に関するものに絞り、必要に応じて補助発問で補うようにした。また、「一冊のノート」は8ページにわたる長文の教材だが、生徒が一読で内容を捉えて発問について考えることができるよう、間の取り方や声の調子などを工夫し、丁寧に範読を行った。

T：なぜ「僕」は黙って祖母と並んで草取りを始めたのだろうか。

S1：祖母をののしったことを後悔すると同時に、祖母の記憶が弱くなってしまって急に寂しくなった。今度は支えられる側から支える側になろうという思いを伝えようと思ったから。

S2：自分でも記憶が弱くなってきていることを感じつつも、自分たち家族のことを陰ながら思っていた祖母に対して、申し訳ない気持ちと感謝の思いが込み上げてきて、祖母に対して自分のできることをしようと考えたから。

S3：祖母にいろいろな思いや感謝を伝えたいけれど、うまく言葉にできないのでせめて隣に並んで、祖母と一緒に時間を過ごそうと思ったから。

◇ ねらいとする道徳的価値についての理解を深める

- ・ 家族は一番身近な存在だが、身近であるがゆえに、受けている愛情に気付けなかったり、大切に思うことを忘れてしまったりすることがあるということ。
- ・ 家族にはそれぞれ役割があり、その役割を果たしながら一人一人がよりよい家庭生活を実現させていこうとすることで、家族としての生活が充実していくのだということ。

つまり → 一人一人が互いに思い合い、支え合いながら暮らしていくのが家族である。

【2 議論を通して、ねらいについての考えを深める】

議論の課題は、事前に生徒に対して行ったアンケート調査（「あなたが今、悩んだり困ったりしていることは何ですか。」）を基に作成し、生徒自身にとって現実味のある身近な課題となるよう工夫した。また、家族との関わり方を見つめ直させるねらいから、「親」の立場で子に接するという設定にした。

T：あなたの子が、自分にはよいところなどないと感じて何事にも自信がもてず、自分の将来にも夢をもてずに悩んでいます。あなたは「親」として、子供にどのように接しますか。また、それはなぜですか。

S1：じっくりと話を聞いてあげてから、自分が中学生や高校生の頃に感じたことや考えたことを話してあげる。そばには私（親）がいるし、みんなそうやって悩んできたことを伝えて、少しでも安心させてあげたいから。

S2：でも、あまりこちら（親）から寄っていくと、逆効果になりそうな気がする。私は、向こう（子）から相談してきたら話を聞くけれど、それまでは黙って見守る。自分で乗り越えたり解決したりできるようになることが大切だと思うから。

S3：やっぱり子供が悩んでいたら、心配であれこれ聞いたり声を掛けたりしてしまうと思う。状況が分からないと親としては余計に心配になってしまう。私はあれこれ聞こうとしてしまうと思う。

S1：それは、自分の心配をなくしたいからで、子供のことを考えての行動ではないような気がする。

S2：親に心配かけないように、明るく振る舞ったりするかもしれない。

S3：つらい時や苦しい時に、それをちゃんと聞いたり伝えたりできるようになれるといいけれど、そのためには日頃からの付き合い方が大切だと思う。

S2：でも、親がどんなことで悩んだり苦しんだりしているのか、子供には分からないことが多いと思う。

S1：それは、大人と子供との違いだからしかたない気がするけれど。子供に親が悩みを相談するなんて、なんか変だと思うし。

S3：でも、逆に親が子供に悩みを打ち明けたり相談したりすることで、子供が、自分は親に信頼されているんだなって実感できるかもしれない。

S2：今はまだ対等というわけにはいかないだろうけれど、少しずつ大人になっていくにつれて、親子の関係も変わっていくんだろうね。

◇ ねらいとする道徳的価値についての考えを深める

- ・ 同じ悩みを抱えている子に対しても、親の立場に立ってみるとその接し方は様々であり、どちらのほうが良いとか悪いとかは言えない。
- ・ どの接し方であっても、その根底には子を思う親の心情があり、子を救いたい、子が心身共に健やかでいてほしいという無償の愛がある。

つまり → 親には親としての立場・役割があり、それを果たしながら家族を成立させている。

〈板書計画〉

一冊のノート

あなたにとって「家族」とは、どのような存在ですか。

- ・いつも一緒にいる
- ・かけがえのない存在
- ・自分を応援してくれる
- ・ちょっとどうるさく感じる時もある

なぜ「僕」は黙って祖母と並んで草取りを始めたのだろうか。

- ・「ごめんなさい」という思いを示そうと思った。
- ・何か自分にできることをしてあげたかった。
- ・感謝の気持ちを行動で表したかった。

○自分に愛情を注いできてくれた祖母に、自分も優しい気持ちで寄り添いたいと思ったから。

【議論】あなたが「親」ならどうしますか。

自分にはよいところなどない。何事にも自信をもてない。自分の将来にも夢をもてない……

◆どのように接しますか？

↓ 違いはどこから生まれるのだろうか。

◆なぜ、そのように接するのですか？

↓ そこから見えてくるものは何だろうか。

一人一人互いに思い合い、支え合い、役割を果たしていくのが家族。

〈授業後の生徒の感想（抜粋）〉

- ・ 「一冊のノート」で、最後に「僕」がおばあちゃんと並んで草取りをする場面がすごく印象に残りました。話合いの時も、子供はどんな気持ちなのだろう、自分は親として何をしてあげられるのだろうと、一生懸命考えました。自分の親も、こんなふうに分かっているのだから、一生懸命考えているのだと思い、もっともっと感謝しなければいけないと感じました。
- ・ 僕は家の手伝いもせず、いつもわがままばかり言っています。自分でも分かっているし、それで親が困ったり怒ったりしているのも分かっています。分かっているのに、またやってしまう。いつもその繰り返しです。そんな僕なのに、親はそれでも僕の面倒を見て、僕を育ててくれています。ちゃんと感謝しないといけないなと思いました。ちょっとだけでも、家の手伝いをしようと思います。
- ・ 自分が親の立場になって、困っている子供のことを考えるなんて、初めはそんなことできないと思っていましたが、グループで話し合っていくうちに、なんだか本当に困っている自分の子供をなんとかしてあげたいという気持ちになりました。みんなの考え方や接し方も納得できるものが多くて、驚きました。
- ・ 僕はいつも親からああしろとかこうしろとか言われていて、「うるさいなあ」と思っていました。だから、自分が親なら一切何も言わずにいようと思いました。でも、みんなの意見を聞いているうちに、いつのまにか自分には何ができるだろう、何をしてあげられるんだろうと考え込んでいました。親って大変なんだなと、しみじみ思いました。
- ・ みんなすごく真剣に考えていて、私には思いつかないような考え方や接し方が出てきて、びっくりしました。私はいつも家族には感謝していますが、それでもまだまだ見えていないことがたくさんあるんだろうなと思いました。そういうところも見えるようになろうと思います。

7 成果と課題

【1 教材を通してねらいについての理解を深める】

(1) 成果

- ・ 丁寧な範読を行って教材の概要を理解させ、発問を「なぜ、僕は黙って祖母と並んで草取りを始めたのだろうか」の一つに絞ったことにより、授業のポイントを明確にすることができ、また、ねらいとする道徳的価値について直接的に捉えさせることができた。

(2) 課題

- ・ 「一冊のノート」のように長文の教材において発問を絞り込むためには、ねらいとする道徳的価値と照らし合わせて、教師が教材を読み込んでおくことが必要である。また、範読だけで概要が理解できなかった場合の的確な補助発問をあらかじめ準備しておくことも必要である。

【2 議論を通してねらいについての考えを深める】

(1) 成果

- ・ 生徒が家族の一員としてあるべき姿をグループで議論することを通して、道徳的判断（こうあるべきだ、こうであることが正しいはずだ）を道徳的行為（こうしよう、こうすればいい）へとつなげようとする自覚を促すことができた。
- ・ 家族の一員として「今後出会うであろう様々な場面や状況」を想定した発問や議論を通して、客観的に自分の生活を振り返らせることができた。「家族」に対する接し方などについて自分と他者との意見や考えの相違から学び、自己の考えを深めることができた実感した生徒は、検証授業を行った生徒の89.6%であった。

(2) 課題

- ・ 議論する課題を焦点化することが必要である。話し合う課題がいくつもあつたり、漠然としていたりすると、生徒の意見が広がり過ぎてしまつたり、限られた時間内で話し合いが深まらなかつたりする。その授業のねらいを達成する上で必要な課題に焦点化して、議論させることが重要である。
- ・ 議論を深めるためには、自分の考えと他の生徒の考えとを関連付けながら話し合うことができなければならない。多くの発言があつても、その発言がそれぞれ他の生徒の発言と関連していかなければ、議論は深まらない。課題に沿って、相手の発言を受け止め、それに対して自分の発言を関連付けて返していく技能を、生徒に身に付けさせていくことが必要である。
- ・ 検証授業を通して、生徒が、「答えのない問題」や「答えが一つではない問題」について話し合うことに慣れていないと感じた。また、結論を急ぎ過程を大切にできていないグループも見られた。これは、道徳の教科化の鍵となる部分に関わることであり、議論の設定の仕方や生徒への投げ掛け方など、引き続き検討が必要である。

〈指導例3：第3学年〉

1 主題名 人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだす。 内容項目D(22)

2 資料名 「足袋の季節」(出典：中学校道徳の指導資料(昭和42年)文部省編)

3 本時のねらい

人間には弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として内なる良心に恥じることなく、よりよく生きていくための道徳的判断力を育てる。

4 教材について

小学校を出てすぐに伯母の家に預けられ、小樽の郵便局で働き始めた「わたし」は、寒くても足袋一枚買うことができなかった。冬のある日、大福もちを売るおばあさんのもとに使いに行った「わたし」は、足袋欲しさに釣り銭をごまかしてしまう。以来、自責の念や良心の呵責(かしゃく)に苦しみ続けながらも、やがて成長し正規の郵便局員として初めて月給をもらうと、あのおばあさんを訪ねる。しかし、おばあさんはすでに亡くなっていた。その後、「わたし」は後悔の念にさいなまれながらも、おばあさんの姿を思い出し、つらくてもくじけずに生きた。弱く醜い自分に押しつぶされそうになりながらも、おばあさんの言葉と姿を胸に、必死に生きた「わたし」の姿を通して、自分の弱さ醜さを乗り越え強く生きていくための道徳的判断力の育成を図ることのできる教材である。

5 本時の学習活動

| | 主な学習活動(○基本発問◎中心発問・予想される生徒の反応) | 指導上の留意点 |
|----|---|--|
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 「足袋」を知っていますか。 ・ 靴下のようなもの ・ 着物を着る時に履く ・ 昔の履物 ・ 親指だけ分かれています | <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在は身近でなくなった「足袋」について理解させ、教材への導入を図る。 ・ 決して高価な(ぜいたくな)品ではなかったことを確認しておく。 |
| 展開 | <p>1 教材を通して、ねらいについての理解を深める</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ おばあさんに「五十銭玉だったね?」と聞かれ、「うん。」とうなずいてしまった時、「わたし」はどのようなことを考えていただろうか。 ・ 四十銭あれば足袋が買える。うれしい。 ・ おばあさんが勝手に間違えたのだから、四十銭をもらっても自分は悪くない。 ・ ここで四十銭のお釣りをもらっても、自分をごまかしたとは誰も気付かないはずだ。 ・ きっとこれはずっと我慢してきた自分へのご褒美だ。 <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 弱い自分・醜い自分 <ul style="list-style-type: none"> ○ おばあさんの目と言葉に支えられてきたとあるが、「わたし」はどのような思いで生きてきたのだろうか。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が「足袋の季節」を範読する。 ・ 必要に応じて、教材のあらすじを説明したり、生徒に確かめさせたりする。 ・ 「わたし」がこの一瞬、自分の中の弱さ・醜さに負けてしまったことを捉えさせる。 ・ この場面に至るまでの「わたし」の置かれた状況も踏まえさせ、「わたし」が生来悪い心をもった人間ではないことを理解させるようにする。 ・ 「わたし」がおばあさんの死をどのように受け止め、それがどのように生き方に影響したかを捉えさせる。 |

| | | |
|--------|--|---|
| 展 開 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のしてしまったことは、もう取り返しがつかないのだ。 ・ どうすれば、おばあさんへの償いができるのだろうか。 ・ 後悔や自分を責める気持ちをもったまま、それでも自分は生きていかなければならないのだ。 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>「おばあさんがわたしにくれた心を、今度はわたしがどれかにさしあげなければならない」</p> <p>2 議論を通して、ねらいについての考えを深める</p> <p style="text-align: center;">【議論】 あなたの人生を支えるものは何ですか。</p> <p>◎ これから生きていく上で、あなたを支えてくれるものは何だろうか。なぜ、それがあなたの人生を支えてくれるのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 失敗から学んだこと。 <ul style="list-style-type: none"> → 同じ失敗を繰り返さずに生きていけるから。 ・ 困難を乗り越えた経験。 <ul style="list-style-type: none"> → 新しい困難も乗り越えていくことができるから。 ・ 一つ一つ積み上げてきたもの。(努力・練習) <ul style="list-style-type: none"> → これだけやってきたという自信になるから。 <p>○ グループの議論を発表し合おう。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 「わたし」が職を転々としながらもくじけずやり通せたことに着目させ、自分の弱さや醜さと向き合い必死に生きていこうとしている「わたし」の姿を共感的に捉えさせるようにする。 |
| | <p>◎ これから生きていく上で、あなたを支えてくれるものは何だろうか。なぜ、それがあなたの人生を支えてくれるのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 失敗から学んだこと。 <ul style="list-style-type: none"> → 同じ失敗を繰り返さずに生きていけるから。 ・ 困難を乗り越えた経験。 <ul style="list-style-type: none"> → 新しい困難も乗り越えていくことができるから。 ・ 一つ一つ積み上げてきたもの。(努力・練習) <ul style="list-style-type: none"> → これだけやってきたという自信になるから。 <p>○ グループの議論を発表し合おう。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートに自分個人の意見や考えを整理し記入させてから議論に取り組ませるようにする。 ・ 「これからの人生」で出会うであろう様々な失敗や困難を想像させながら、その時自分がどのように対処するかを考えさせるようにする。 ・ 議論では、互いの意見のよさを確かめ合いながら、自分がよりよく生きるための支えとなるものの参考にしていこう助言する。 ・ グループの議論の内容を発表させ、学級全体で共有させる。 |
| 終 末 | <p>○ この時間で考えたことや学んだことを振り返って整理しよう。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時を振り返り、特に議論の中で気付いたことや考えたこと、学んだことをワークシートに整理して記入させ、自己の変容を確かめさせる。 |
| 評 価 | <ul style="list-style-type: none"> ◆ 自分の弱さに負けたり醜さに気付いたりしても、人間にはそれを乗り越えて生きていこうとする強さがあることを、理解することができた。 ◆ よりよい人生を実現するために必要な判断力を高めることができた。 | |

6 指導の実際

実際の活動

【1 教材を通してねらいについての理解を深める】

議論の時間を十分に確保できるよう、教材についての発問を中心的な場面に関するものに絞り、必要に応じて補助発問で補うようにした。第1学年及び第2学年の検証授業では、教材に関わる発問を一つに絞ったが、第3学年で取り上げた「足袋の季節」は、自分の弱さ・醜さに負けてしまった「わたし」を丁寧に捉えた上でなければ中心となる場面を捉えられない教材であると判断し、教材に関わる発問を二つに絞った。

T : おばあさんの目と言葉に支えられてきたとあるが、「わたし」はどのような思いで生きてきたのだろうか。

S 1 : あの時、釣り銭をごまかしたことをずっと後悔しながらも、「ふんばりなさいよ」というおばあさんの言葉を支えに、しっかりと生きていこうという思い。

S 2 : 自分の大きな過ちを忘れずに、その重さを背負ったまま、逃げずに生きていこうという思い。

S 3 : 直接おばあさんに自分の犯した罪を償うことはもうできないけれど、あの時のおばあさんの目と同じように見られても恥ずかしくない自分でいようという思い。

◇ ねらいとする道徳的価値についての理解を深める

- ・ 一度犯してしまった過ちを「なかったこと」にすることはできないが、それを別の形で償うことはできるのかもしれない。
- ・ 失敗をしたり困難にぶつかったりした時に、そこで逃げたり諦めたりしてしまわずに、前に進み続けていこうとすることが大切なのだ。

つまり → 人間は、どんなに弱くても醜くても、よりよく生きていくための力や支えをもっている。

【2 議論を通してねらいについての考えを深める】

「わたし」と同じような経験を生徒から出させることは適切ではないと考え、「これからの人生」に目を向けさせるように配慮した。今後の人生で出会うであろう様々な失敗や困難を想像させながら、その時に人間は何を支えにどのように生きていけばよいのかについて議論させることを通して、よりよい人生を実現させていくための道徳的判断力について考えを深めさせるようにした。

T : これからの人生を生きていく上で、あなたを支えてくれるものは何だろうか。なぜ、それがあなたの人生を支えてくれるのだろうか。

S 1 : 「失敗」だと思う。うまくいった時よりも失敗した時のほうが多くのことを学べるし、そこで学んだことは、その後の人生に生かしていけるから。

S 2 : 失敗はしないほうがいいのだから、失敗しないために「準備や努力」をすることも大切だと思う。しっかりと準備や努力をすれば、自分はこれだけやってきたんだという自信にもつながるし、その自信の積み重ねが自分を支えてくれると思う。

S 3 : 辛いことや厳しい状況を「乗り越えた経験」が支えになると思う。どれだけ準備や努力をしても失敗することはあるし、自分はちゃんとできていても周りの状況でうまくいかない時もある。そういう時に、それを乗り越えられた経験が、別の辛いことや厳しい状況に出会った時にも「きつと乗り越えられる」という支えになると思う。

S 2 : S 1 さんと S 3 さんの意見は、似ているように思う。

S 1 : 確かに、失敗そのものが支えてくれるわけではなくて、「失敗から学んだこと」が支えてくれるということだから、S 3 さんの意見と重なるかもしれない。

S 3 : S 2 さんの「準備や努力」もとても大切だと思う。準備も努力もしないで失敗したのだとしたら、そこからは何も学べないと思う。

◆ ねらいとする道徳的価値についての考えを深める

- ・ 生きていく上では、失敗をしたり困難に直面したりすることを避けられない。また、自分の弱さに負けてしまったり、自分の醜さを見せつけられたりすることもある。
- ・ どんな状況に置かれても、人間はくじけず諦めずに前に進んでいかなければならない。そのためには、自分によりよい人生を実現できる力があることを信じる必要がある。

つまり → 人は、己の弱さや醜さを乗り越え、よりよい人生の実現を支えてくれるものをもっている。

〈板書計画〉

足袋の季節

おばあさんに「五十銭玉だったね?」と聞かれ、「うん。」とうなずいてしまった時、「わたし」はどのようなことを考えていただろうか。

- ・ 足袋が買える。うれしい。
- ・ おばあさんが間違えたのだから、自分は悪くない。
- ・ もらっても誰にも気付かれないはずだ。
- ・ 我慢してきた自分へのご褒美だ。

○その後……弱い自分・醜い自分

おばあさんの目と言葉に支えられてきたとあるが、「わたし」はどのような思いで生きてきたのだろうか。

- ・ してしまったことは、もう取り返しがつかない。
- ・ どうすれば償いかできるのだろうか。
- ・ 後悔や自責の念を背負ったまま生きていかなければならないのだ。

○おばあさんがわたしにくれた心を、今度は、私が見ることに……

【議論】あなたがあなたの人生を支えるものは何だろうか。なぜ、それがあなたの人生を支えてくれるのだろうか。

人は、己の弱さや醜さを乗り越え、よりよい人生の実現を支えてくれるものを持っている。

〈授業後の生徒の感想（抜粋）〉

- ・ やってしまったことは、あとでいくら悔やんでも変えることはできない。これまでもそうだったし、これからもそうなのだと思う。だから、いいことも悪いことも含めて、自分の経験をそのあとの自分自身に活かしていくことが大切だと思った。
- ・ 試合に負けた時などに、チームメイトのミスのせいになっていることがあった。あのミスがなければ勝っていたはずだと、言い訳をしていた自分に気が付いた。恥ずかしくなった。自分は全力を出せていたのか、もっと上達するために自分はどうすればいいのか、自分をもっとちゃんと見つめていかないといけないと思った。
- ・ 私はいつも自分に甘い。それではいけないと分かっているし、そういう自分を変えなければいけないといつも思っている。でも、できなくて、また自分に甘くして、やるべきことをやらず、さぼったりなまけたりしてしまう。話合いの中で、最後の最後に自分を支えるのは自分自身なのだとあらためて実感した。自分を甘やかすことは、自分を大事にしないことと同じだ。これからは少しずつでも自分をちゃんと大切にしていきたいと思う。
- ・ これまでのたった十五年の人生でも、後悔していることが数えきれないくらいある。これから何十年も生きていく中で、どれくらい後悔するのだろうか考えると、すごく重い気持ちになる。でも、それが人間なのかもしれないと思った。たくさん後悔するけれど、それを少しでも減らせるように、同じ後悔を繰り返さないように、そうやって生きていくのが人生なのかもしれないと思った。
- ・ 失敗から学んで次に活かすというのは、頭では分かっているけれど、とても難しいことだと思う。私自身も、同じ失敗を何度も何度も繰り返して、そのたびに後悔している。今日の話合いの中で、私は、「自分で自分を嫌いにならないこと」が大切なのだと感じた。「いつか私も失敗しないようになるから大丈夫」と、自分で自分に言ってあげるようにしたいと思った。

7 成果と課題

【1 教材を通してねらいについての理解を深める】

(1) 成果

- ・ 「わたし」の弱さ・醜さが出てしまった時の内面と、その後「わたし」がどのような思いで生きてきたかの二つの内容について発問をした。前者では、生徒がそれぞれ自分自身と照らし、自分の中にも弱さや醜さがあることを実感させることができた。また、後者では、自分は弱さや醜さから逃げずに向き合っているだろうかと内省する様子が見られた。
- ・ 教材を通して「人間の弱さ・醜さ」と「それを乗り越えよりよく生きようとする姿」について共感的に捉えられたことで、そのあとの議論においても、自分自身がよりよく生きるためにはという視点から意見や考えを述べられていた。

(2) 課題

- ・ 「わたし」の行為に関心が向かってしまったことで、発問に対する発言が、正直さや誠実さの重要性に偏ってしまう生徒が見られた。また、「おばあさん」への感謝にとどまってしまう、「わたし」の生き方を捉えることができなかつた生徒もいた。「どう生きるべきか」、「よりよく生きるためには」といった、この時間のねらいに関わるテーマのようなものを黒板に貼って意識させるなどの工夫が必要だったと考えられる。

【2 議論を通してねらいについての考えを深める】

(1) 成果

- ・ 今の自分自身の弱さや醜さと向き合いながら、将来よりよい人生を実現させていくためには何を支えにどのように生きていけばよいのかを、一人一人が真剣に考え、互いの意見や考えから学び合っていた。
- ・ 議論の課題自体は「未来」を見つめさせるものであったが、今の自分の姿や生き方を客観的に見つめ直させることもできた。「授業後の生徒の感想」にも、今の自分の生き方を客観的な目で分析しているものが目立った。
- ・ 「自分の人生を支えてくれるもの」として、多様な意見が出された。先述の「失敗」、「経験」、「努力」といったものの他にも、家族や友人、偉人の言葉、プライド、宝物（子供の頃から大切にしているもの）などが挙げられていた。併せて「なぜ、それが」を説明させたことで、自分を支えるとはどういうことなのかについて、生徒一人一人が考え、互いに学び合うことができた。

(2) 課題

- ・ 議論の課題が抽象的な要素を含んでいることや、発達の段階によっては弱さ・醜さという視点から自分自身を深く内省することのできない生徒がいることなどから、自分の意見は出せてもそのあとの議論で考えを深めていくことのできないグループもあった。学級全体や個別のグループの状況を把握し、必要に応じて生徒たちがこれから出会うであろう具体的な場面などについて、教師が例示するなどの補足が必要である。
- ・ 現在や過去の自分の弱さ・醜さの具体を表出させるような展開にしないよう配慮が必要である。また、弱さ・醜さにばかり目を向けさせるのではなく、あくまでもそれを乗り越えられる力や支えがあるのだという点に、議論の方向を向けさせていくことが大切である。今の自分を反省して終わることのないよう、学級全体や個別のグループに対して、教師が助言していくことが必要である。

VI 研究の成果と課題

本研究は、生徒に身に付けさせるべき道徳性の中で、特に「人間としてどのように対処すべきか」という道徳的判断力の育成に焦点を当て、研究主題を「議論を通して道徳的判断力を育てる道徳科の指導の工夫」として研究を行った。以下、研究の成果と課題を整理する。

1 研究主題設定の前提について

本研究では、改正学習指導要領で示された道徳科の目標を踏まえ、

- ・ 道徳的価値の意味や意義について深く理解させること。
- ・ 道徳的価値について理解させた上で、自己を見つめ直したり、異なるものの見方や考え方に触れたりできるよう、効果的に議論する場面を設定すること。
- ・ 自己の在り方・生き方を見つめる先に、人間としての在り方・生き方という視点をもち、考えを深められるようにすること。

の3点を基盤として指導の工夫を検討してきた。

本研究で示した考え方及び検証授業の方法については、今後求められる道徳科の授業の在り方の先行的な事例として提案することができた。特に、議論の課題については、ねらいとする道徳的価値について自分の問題として捉え、人間としての生き方・在り方と照らし合わせながら考えを深めさせるという点で、道徳科で求められる指導の在り方に沿うものとなった。

2 仮説及び仮説の検証について

— 仮説 —

生徒が実生活で出会うであろう場面や状況において、「人間としてどのように対処することが望まれるか」を議論させることにより、道徳的価値の多面性に気付かせるとともに、物事を様々な角度から考察させることができ、道徳的判断力を育てることができるだろう。

本研究では、以下の3点から、仮説の検証を行った。

- ①教材を活用し、発問を精選して、道徳的価値について深く理解させる。
- ②課題についてグループで議論させ、ものの見方や考え方を広げたり深めたりさせる。
- ③学習を振り返らせ、自己のものの見方や考え方の変化や深化を確かめさせる。

① 発問について

〔成果〕 検証授業では、授業の後半に議論する時間を確保する必要性から、発問を1～2問に絞った。ねらいとする道徳的価値についての理解を深めさせるという視点から、着目させたい場面や内容を絞り、発問を精選したことで、この授業でどのようなことを考えたり学んだりするのかを焦点化することができた。

〔課題〕 検証授業で扱った教材のうち、「一冊のノート」と「足袋の季節」は比較的に長文の教材である。ねらいとする道徳的価値と照らし合わせながら、どの場面に着目させ、どのように発問をするかについて、十分に教材研究をする必要がある。また、時代背景や内容の理解に必要と考えられる補足事項等については、ワークシートや視聴覚教材などによって補うよう工夫し、課題について議論するための時間を確保できるようにすることも必要である。

② 議論について

〔成果〕 議論については、教材の内容から離れ、実生活で出会うであろう場面や状況を想定した課題を設定し、話し合いを行わせた。話し合いはどの学年も3～4人のグループで行ったが、いずれの検証授業においても生徒たちは熱心に話し合いに取り組んでいた。授

業後の感想などからも、ねらいとする道徳的価値について意見を交流させながら、多角的・多面的に捉えたり考えを深めたりすることができたことが確かめられた。これは、本研究の研究主題である道徳的判断力の育成につながるものである。

〔課題〕 一方で、授業前半の教材を活用した展開と後半の課題についての議論とが、生徒にとってそれぞれ個別の活動のようになってしまっていると感じられる場面もあった。意図的に教材の内容から離れた課題を設定したことが、その主な原因と考えられる。教材を読み考えることも、課題について議論することも、共に「本時のねらい」を達成するための手だてであり、そこに一貫性がなければならない。そのためにも、常にその時間のねらいとする道徳的価値に立ち戻り、確かめながら授業を展開していくことが必要である。

③ 振り返りについて

〔成果〕 授業後の感想が大きく変わったことが成果として挙げられる。これまでは、その授業で扱った教材の感想であったり、「望ましいと思われる分かったこと」であったりするものが多かった。しかし、検証授業では、特に議論を通して真剣に考えたり、他の生徒の意見や考えに学び、見方や考え方が広がったり深まったりしたことを記入している生徒が多かった。また、今後の自分の在り方について、道徳的価値に基づいて行動しようとしている内容も多く、ここでも道徳的判断力の育成につながる成果が認められた。

〔課題〕 生徒自身が自分の変容を客観的に確かめたり、自己評価したりするための手だての工夫が必要である。自分に道徳性が養われたという実感や、実践意欲、態度といったものの変化を自ら自覚することが、それらの定着とその後の実践のために不可欠である。例えば、授業開始時と授業終了時との自分を比較できるようなワークシートを活用することなどが考えられる。また、同じ内容項目について、1年次と2年次、2年次と3年次で自分の見方や考え方がどのように変化しているかを見られるように、道徳ノートなどをつくって活用するといった方法も効果的であろう。

本研究は、「議論を通して道徳的判断力を育てる道徳科の指導の工夫」を研究主題として研究を行った。ねらいとする道徳的価値について、多角的・多面的に考えさせたり、自覚を深めさせたりするために、議論という活動が効果的であることは検証できた。しかし、ねらいとする道徳的価値や扱う教材、生徒の発達段階や実態等に応じて、どのような課題について議論させるかについては継続して検討していくことが必要である、また、議論をさせること自体が目的であるかのような授業とならないよう、あくまでもねらいを達成するための手段・手だてであることを常に留意しておくことが重要である。

これまで、各教科等において様々な言語活動が工夫・実践されてきた。それぞれの教科において、その特性を踏まえた効果的な言語活動が実践されてきたのと同様に、道徳科においても、その特性に応じた言語活動を行っていくことが必要である。「よりよく生きる基盤となる道徳性」を着実に育むためには、どのような課題について、どのような言語活動に取り組みせていくことが効果的であるのか、各教科等における優れた言語活動の実践等も参考にしながら、引き続き検証を行っていきたい。

平成 27 年度 教育研究員名簿

中 学 校 ・ 道 徳

| 地 区 | 学 校 名 | 職 名 | 氏 名 |
|------|-----------------|------|----------|
| 江東区 | 江東区立深川第五中学校 | 主幹教諭 | 松 村 麗 |
| 杉並区 | 杉並区立東田中学校 | 教 諭 | ◎戸 上 琢 也 |
| 八王子市 | 八王子市立ひよどり山中学校 | 教 諭 | 中 川 真 |
| 三鷹市 | 三鷹の森学園三鷹市立第三中学校 | 教 諭 | 白 石 洋 平 |
| 都立学校 | 都立小石川中等教育学校 | 教 諭 | 永 井 充 |

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部義務教育指導課
指導主事 吉 川 泰 弘

平成27年度
教育研究員研究報告書

中学校・道徳

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成27年度第197号〕

平成28年3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 正和商事株式会社

リサイクル適性[®]

この印刷物は、板紙へ
リサイクルできます。